

### 保線スペシャリスト 編

[登壇者] 小山内 政廣

(株)日本線路技術

東京オリンピックを契機に、急ピッチで社会基盤整備が求められた時代に鉄道技術を支えた技術者がいる。今回は、今なお保線屋人生を歩み続けている保線のスペシャリスト、小山内政廣さんの技術者人生に迫る。

**最初は土木屋になる気はなかった!?**

「国鉄に入るなら、カッコいい車掌さんになりたい」。高校時代に、「赤い腕章」という国鉄車掌物語の本に影響された小山内さんは、卒業後、営業部門へ(運転手、車掌)で国鉄に入社した。入社1年後、もともと大学に進学したかった小山内さんは、先輩の勧めで日本大学理工学部土木工学科に入学した。「平日は上野駅で仕事をして、土日は4年間休まず実習に行つたよ」。土木屋人生へのターニングポイントが、この大学4年間でやってきたのだ。「構造力学や土質力学、水理学の専門知識以外にも、設計・施工技術の実務を神奈川県庁やゼネコン、コンサルの技術屋に直接教わつたよ」。大学の講師や周りの学生は、上は40代、下は20代で、あらゆる分野の技術屋だったそうだ。各分野の土木技術者集団との出会いにより感化された小山内さんは、大学卒業後、営業屋から技術屋の道にシフトしたのだ。その後、1973年に国鉄本社の保線専門の部署へ配属されるが、この本社配属がきっかけとなり、小山内さんの保線屋

人生がスタートした。「毎日が工事推進のための会議。忙しかったけど、配属後3ヶ月間でおもしろさを見つけたよ」。当時は新幹線や在来線など、鉄道建設真っただ中の時代で、保線課にいた小山内さんは、急務を要する建設・改良工事と明治・大正時代に制定された、時代に合わない古い規則、規程の運用とその改訂、そして実務者との相談、協議に明け暮れていたそうだ。その業務の傍ら2001年までに16もの委員会(軌道工事標準示方書の研究委員会や本州、四国連絡橋の列車走行に関する研究委員会など)に所属していた。線路検査の周期など二つの法令、省令を改訂するにおおよそ20年近い時間を要する条文もあったと小山内さんは言う。並大抵の人間にはできない偉業を成し遂げた小山内さんを見て、技術者には知的ハングリー精神と情熱が必要不可欠であるということを実



写真1 北京-天津間の開業前の軌道調査をしている小山内さん(写真中央)

感じた。

**現場で起きた問題は己の目で必ず確認せよ!**

現在も頻繁に現場へ行くことがあるという小山内さんは、「現場で問題が発生した際に、現場を見ずに答えを出し



写真2 取材風景

おさない・まさひろさん

1947年、青森県生まれ。県立弘前高校卒業後、日本国有鉄道に入社。1987年東日本旅客鉄道(株)に入社。施設電気部保線課課長代理、調査役、設備部線路設備課担当課長を歴任。その後、(株)日本線路技術に入社。現在、(株)日本線路技術常務取締役。64歳。

たことは一度もない」という。過去には、1日1回は必ず線路を確認しに行かなければならないという法令があったそう。現在はその法令はないが、現場で問題が発生した際に解を求められた場合には、自らの目で見て決断を下すのが小山内さんのモットーだ。「トラブルが発生するまでは部下にガンガン言うよ。でもトラブルが生じたら、後は俺の出番だ。いい上司とは、何か問題が発生した際に、全責任を負える覚悟ができている人間のことだと俺は思う」。部下へチャンスを与えつつも、課された問題は自らで責任を持って処理するのが小山内さんの指導方法だ。そして、現場で問題が発生したときは、すぐに現場に行かせるのだという。

腕 仕事のやり方・考え方

「新技術を導入したために、列車を止めてしまったことや列車が揺れるなどの苦情も多々ある。だけど、あらゆるリスクと闘いながら挑戦し続けることによって、在来線は時速130km化、時速240・260・275kmの新幹線を走らせることができた」。一度列車が止まれば莫大な経済損失が発生し、社会的信頼をも失ってしまう。しかし、経済発展や景気循環が刻々と変化するに従い、鉄道技術にも革新がなければなら

ない。国鉄の分割・民営を機に国を挙げて鉄道の技術基準の抜本的な見直しや変革に小山内さんは20数年以上参画してきた。在来線のリニューアルや時速300km領域の新幹線の営業運転につながっているという。技術革新を追求し続けている小山内さんの仕事に対する考え方は、「上司からやるなどと言われたことをひそかにやる」だ。小山内さんのような粘り強く自分の信念を貫き続けている技術者になるためには、何事にも粉骨砕身するパワーと忍耐力が必要不可欠であることがわかった。

腕 海外へ行け!

軌道を保つのに重要な材料で枕木というものがある。たとえばベトナムの枕木の価格は日本の3分の1程度にもかかわらず、品質は日本とさほど変わらないと小山内さんは言う。日本と同等レベルの品質を保ちつつ日本よりも安くモノをつくる技術力がベトナムにはあるそうだ。「海外へ行き、実物を見て技術を学べ」。建設需要がある他国では、自ずと新技術が開発され続けている。メンテナンス時代に突入した日本は、他国に比べて建設技術の劣る時代が到来する恐れがある。技術者を目指すわれわれ学生は、その事実を自分の目で確かめに行く必要があると思った。

腕 取材を終えて

「俺はまだまだ技術者ではない。もっと凄い人たちがいっぱいいるから」。小山内さんは、なぜここまで自己研鑽するのだろうか。「これから技術者になる若い人たちに夢があるような仕事をつくらせてあげたいから」。この言葉を聞いたとき、今日の日本があるのは若手技術者のことを想う小山内さんのような先輩技術者が、若手技術者へ技術を伝承しているからだと思うと同時に、われわれの世代が次の日本を背負うのだという使命感を持つことができた。

学生編集委員 辻本剛士、相沢圭俊

今月のスゴ腕 技術者からの一言

「毎日建設に携わっている者は腕が上がる。インフラが整っている日本では建設の勉強はできないので、言葉(特に英語)を覚えて、日本から出ていくことを目標にして欲しい。建設している間に、新たな論理や技術が出てくる。外へ行かなければ日本は遅れるよ」と小山内さんは語る。これから技術者を目指す者は他言語の習得は必須であるため、今から取り組む努力をしようと思った。